

## キャラクターショー 14:30~14:45

キャラクターショーでは、宮崎県を中心に活動するご当地ヒーロー「天尊降臨ヒムカイザー」によるヒーローショーが行われました。

ヒムカイザーとともにヒムカイザーの心強い味方であるツクヨミも登場し、ショーを上演すると、会場の子どもたちからは大きな歓声があがりました。

その後は、ヒムカイザーとともにクイズ大会を実施。みんなで盛り上がりました。



## トークショー「家族をテーマにした作品を撮る、映画監督になるまで」

14:45～15:30

映画監督の吉田康弘さんをお迎えし「家族をテーマにした作品を撮る、映画監督になるまで」と題してお話して頂きました。吉田監督は2003年井筒和幸監督『ゲロッパ!』の監督アシスタントとして映画の世界へ、その後2007年『キトキト!』で監督デビュー。デビュー作の『キトキト!』をはじめ、『旅立ちの島唄～十五の春～』、『バースデーカード』そして、2018年10月末から全国公開の映画『かぞくいろ—RAILWAYS わたしたちの出発—』などの家族をテーマにした映画作品を監督されています。



「現在は映画監督ですが幼少期は漫画家になりたかった。父親が電気設計士で配電を描く人でしたので、要らない紙を家に持って帰ってきて、いっぱいある裏紙に絵を描き、物語を考えることを常日頃やっていました。高校の文化祭で映画を作ったのですが、すぐウケて、音やいろいろなことが表現としてできるということに喜びを感じ、映画を志すようになりました。大阪出身なので、やはり笑いが起こると、すぐ気持ちよくなって、自分は才能があると勘違いしてしまった（笑）。

監督デビュー作の2007年公開の『キトキト!』では、早くに夫を亡くして、女手一つで2人の子どもを育てた母親と、その息子の絆を描いた物語を作りました。この映画は監督自身の息子目線でお母さまとの関わりを描きました。僕自身、早くに母を亡くしているので、パワフルな人だった母親のことをやりたいなど。息子と母親の関係を映画化したいという思いで、この企画を進めました。母は僕が学生のときに亡くなっているので映画監督になりたいとは伝えられなかった。母親に捧げるようなつもりで作りました。「生きた証を見つけなあかん」というようなセリフが出てきますが、それは、母親から言われてずっと残っていたことなのでテーマにさせてもらっています。

『旅立ちの島唄～十五の春～』という映画は、高校がない沖縄の南大東島を舞台に、15の春に島を旅立ち、離れ離れになる家族の姿を描いています。島の家族たちは、産んだ時から、この子と15歳でお別れだな、ということ意識しながら子育てをされていて、15歳までに全部伝えたいと。僕は7歳の娘がいて15歳で送り出す父親のことがだんだん気になってきて、そこにも何か自分の感情のようなこと、このように送り出したいなという思いでシナリオを書いたりしました。通過儀礼のように最後に島唄を親への感謝の気持ちを込めて歌うのですが、泣いて歌ってはいけないというルールがあります。親に不安を残さず、見事に歌い切って出て行かなければいけない。すごくドラマチックだなと思って映画にした作品です。今の我々の親子関係や、都会での家族関係を少し見つけ直すことができるのではないかなという思いで作りました。

2016年公開の『バースデーカード』は亡くなったお母さんから娘に毎年届くバースデーカードを通して、母と娘の関係を描いています。実際のドキュメントであったことをもとに映画化しているのですが、悲しいお話にたくなくて、最後の手紙を書くということは、亡くなってからも子育てをするというか、子どもの成長に何か携わりたいという、親の最後の姿勢だと思うのです。亡くなってからも、子どもの成長に関わることができる可能性を、こういう手紙というやり方で表現することで、これからそういう別れを迎える人へ、こういうやり方もあるのではないかなということ映画で提示できたらいいなと作りました。泣けるところもありますが、基本的にはエネルギーにあふれた映画になればいいなという思いでやっています。

最新作の『かぞくいろ—RAILWAYS わたしたちの出発—』は、これまで割と家族の映画をやってきて、鉄道を人生になぞらえるとなった時に、駅と駅がつながっている感じや、線路が真っすぐ伸びていく感じを家族という形で表現したいなと思いました。大事にしたかったのは、家族の形が多様化してきている点です。現代の家族像とは何だろうと考えた時、日々つらいニュースもいっぱい聞こえてきますし、実際に血がつながっていても、その中で暴力がふるわれるなど、そういう家族がある中で、血のつながりだけではない、これからの家族の形ということを何かわれわれ世代として作りたいという思いで、こういうテーマを選びました。新しい家族を作るお話ですけども、そこには血のつながりだけではない絆があるのではないかなということメッセージに込めてやっています。」

（講演内容を一部抜粋）